

非難の認知説は非難の威力を説明できるか？

井保和也（京都大学）

私たちは、何か悪いことをしてしまい、周囲の人に非難されると、ひどく傷つき、惨めな気持ちになる。場合によっては、怒りすら覚えるだろう。このように、非難には被非難者を精神的に傷つける力がある。これは、非難の哲学（philosophy of blame）において、非難の威力（the force of blame）と呼ばれている現象である。私たちが、謝罪、言い訳、責任転嫁、隠蔽などによって、できる限り非難を回避しようとするのも、非難にこうした威力があるからだろう。

興味深いことに、非難は、たとえその内容が誤っていたとしても、依然としてこうした威力を発揮し得る。例えば、あなたの友人が「嘘つき！」と言ってあなたを非難しているが、実際には、それは友人の思い込みに過ぎず、あなたはまったく嘘をついていなかったとしよう。この場合、あなたはこの友人の非難をどう感じるだろうか。友人の非難は事実誤認であるから、気に留める必要はないと考えて、何の痛痒も感じないだろうか。それとも、たとえ誤った非難であると承知しているとしても、その非難を深刻に受け止めてしまい、傷つくことになるだろうか。おそらく後者だろう。このように、非難は、たとえその内容が誤っているとしても、無視できない威力を持ち得るのである。

さらに、非難の威力は非難の公平性（fairness）にも関係している。一般に、非難は、たとえその内容が事実であったとしても、「被非難者は非難の対象となっている行為を自らの意志で行った」といった一定の条件が満たされていない限り、不公平（unfair）になり得る。例えば、公共交通機関の遅延によって遅刻した人を「遅刻だ！」と言って非難することは、たとえそれがある意味では事実に基づいているとしても、不公平であり、許されないことであるように思われる。非難がこのような仕方では不公平になることがあるのは、非難に被非難者を精神的に傷つける威力があるからだろう。

では、非難がこうした威力を持つのはなぜだろうか。非難の威力という現象は、非難が持つどのような特徴によって説明することができるだろうか。ヒエロニミは、非難の認知説（cognitive theory）の立場から、この問いに答えようと試みている（Hieronymi 2004）。認知説とは、非難を被非難者について否定的な判断と考える立場である。ヒエロニミによれば、非難の威力はこの否定的な判断に由来するのである。本発表では、ヒエロニミのこうした試みが失敗に終わっていること、そして、私が以前に提唱した非難の見下し説を採用すれば、この問いにより上手く答えられることを示す（井保 2020）。

Hieronymi, P., 2004, “The Force and Fairness of Blame,” *Philosophical Perspectives*, 18.

井保和也、2020、「『お前が言うな』と非難の哲学：非難の非偽善性条件を検討する」、*Contemporary and Applied Philosophy*, 11。